

水曜通信 28

東北学院大学研究ブランディング事業通信
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

2019年
12月

第28回水曜礼拝（公開大学礼拝） 2019年12月18日（水） 18:30-19:00



説教：川島 堅二（本学文学部教授）

奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）

<礼拝次第>

前 奏：G.B.ネヴィン「羊飼いたちのタベの祈り」

讃美歌：94番「ひさしくまちにし」

聖 書：マタイによる福音書 2章1-12節

讃美歌：103番「まきびとひつじを」

説 教：「キリスト教と占星術」

頌 栄：541番「ちちみこみたまの」

後 奏：J.S.バッハ「暁の星はいと麗しきかな」BWV1-6

後奏の後、本学宗教部聖歌隊4年生によるメサイア
独唱曲での賛美を行ないます。

次回第29回水曜礼拝は1月15日です。

第27回 水曜礼拝報告（説教：田島卓、奏楽：小野なおみ）

2019年11月20日（水）18:30-19:00

讃美歌：39番「日くれて四方はくらく」

聖書：ヨブ記 3章1節－10節、38章1節－3節

讃美歌：136番「ちしおしたたる」

説教：「苦難のなかの叱責」

頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

ヨブ記において、第3章におけるヨブの嘆きと、第38章の神の言葉は対応関係にあります。3章で嘆くヨブに対して、38章の神はヨブを叱責しているように見えますし、それ以降はひたすら自分の創造した世界を自慢しているように見えます。

実は、しかし、こうしたご自分の創られた世界の自慢こそが、ヨブにとってもっとも必要なことだったのではないのでしょうか。神が叱責していたのは、自分自身の存在すらも認められなくなるような、創造の業を否定する姿勢でした。ですから、実は、この神の叱責はヨブの存在の否定ではありません。まったく逆です。あたかも、ヨブ一人を救うために、全世界を賭けているかのようです。そのような神の真摯さを今一度覚えたいと思います。（田島卓）

前奏：J.ブラームス「心よりわれは喜ぶ」

後奏：J.ブラームス「われ心よりあこがれ求む」

前奏、後奏共に19世紀ドイツの作曲家、ヨハネス・ブラームスの「11のコラール前奏曲Op.122」から選びました。ブラームスは器楽曲や声楽作品を数多く作りましたが、人生最後の年に作ったのがドイツの賛美歌に基づいたこのオルガン曲集です。後奏はこの日に歌われた讃美歌136番「血潮したたる」に因んだ作品です。（小野なおみ）



礼拝とその後の19時00分から30分までの鈴木雅光氏（東北学院中学校・高等学校教諭）作・編曲のオルガン曲での賛美に64名の市民が参加されました。オルガンを小野なおみ氏が演奏し、鈴木雅光氏のリードオルガンとの共演も行いました。

礼拝後、オルガン曲による賛美

オルガニストの小野なおみさんのご協力を得て、私がオルガンのために作曲・編曲した作品で賛美をさせて頂きました。「いつくしみ深き」に始まり、美術作品にインスピレーションを得て作曲した「Trace」、アイルランド民謡の「ロンドンデリーの歌」とプログラムが進み、文部省唱歌の「ふるさと」では、作曲者岡野貞一がクリスチャンであったことなど、キリスト教と唱歌との深い関わりについてお話し、古いリードオルガンとの二重奏でお送りしました。最後に小さな祈りの曲で賛美を終えました。礼拝堂がオルガンの穏やかな響きで満たされ、会衆の皆様が心を癒やして頂きました。終了後、リードオルガンに興味を持たれた方々が、楽器に近づき熱心にご覧になって下さっている姿が印象的でした。（鈴木雅光）



オルガンが招いた西洋への憧れ



水曜礼拝での音楽による賛美で使用されたのは、鈴木雅光さんのおばあさまの1930年のヤマハ製のリード・オルガンでした。礼拝堂に入るや正面に置かれた小さなオルガンはとても美しく、存在感は際立っていました。

ここでオルガンが日本の近代に果たした大きな役割を忘れることはできません。仙台にゆかりの星良（1876-1955年。のちの相馬黒光）は、12歳で押川方義から洗礼を受け、宮城女学校で学んだ後、フェリス英和女学校から明治女学校に学んで、信州の相馬愛蔵と結婚。お嫁入り道具は、油絵一枚とオルガンだけだったと言います。そのオルガンは叔母の佐々城豊寿（その娘信子は国木田独歩に嫁す）から贈られたもので、信州の若き萩原守衛（1879-1910）はそういう相馬黒光に接して、西洋に憧れるのです。その



少女時代の相馬黒光(星良)

後、彼はパリに学んでオーギュスト・ロダンを恩師とし、日本近代の最初の最も重要な彫刻家となりました。このようにオルガンは日本各地で、我々の近代の感受性に大きな影響を及ぼしたのです。（鐸木道剛）

一 建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から（5）一

本館と礼拝堂正面に見られる意匠、特に階段室を塔状の扱いにして外観に変化と秩序を与える手法は、様々な様式をこなした建築家・モーガンが繰り返し用いたモチーフでした。鉄筋コンクリート造の躯体に凝灰岩系の石を張って仕上げる重厚な外観もまた、モーガンが好んだ表現でした。今回、こうしたモーガンのデザインの成り立ちを探るため、横浜市内に残る遺構と、モーガンの図面が遺る開港資料館（同市）を訪ねました。シュネーダー院長を中心とする当時の建設委員がこの横浜の建築家に施設の設計を依頼したのは、あるいはそうした質実な表現傾向が、学院の理念を体現する上で相応しいと考えられたからでしょうか。建築を通して先人たちの想いに触れる。歴史的な空間が持つ力を改めて考えさせられる調査となりました。（崎山俊雄）



横浜山手聖公会聖堂（1931,復元）



旧根岸競馬場一等馬見場（1929）

— ランカスター神学校での発見 (13) —

「記録フィルム—創立50周年当時の運動会—」



運動会を撮影したフィルム



保存されているフィルム類

“新たな資料”の中に、中学部の校庭で開催された運動会を記録した16ミリフィルムがあります。当時中学部は、仙台市内の東二番丁（現在のウェスティンホテルの位置）にありました。フィルム缶の中には撮影した内容を記録した用紙が2枚封入されており、それから推測すると、1936（昭和11）年の創立50周年当時の運動会ではないかと思われます。「入場行進の先頭は、シュネーダー院長（当時）と外国伝道局財務のラップ、続いてシュネーダー夫人とラップ夫人、そして神学校長のゾーグと出村（1936年の50周年を機にシュネーダーの後任として院長に選任）・・・」と記録されているからです。

当史資料センターには、卒業生で映画製作者の鈴木三郎氏が撮影した創立40周年（1926年）の記念フィルムが残されており、現在4K化と編集が進められています。この創立50周年当時の記録フィルムは、外国伝道局の関係者が撮影したものであることから、運動会だけではなく記念式典などを撮影した貴重なフィルムが他にも保存されている可能性があり、約百数十巻は残されているフィルム類をさらに精査する必要があるようです。

（東北学院史資料センター 日野 哲）

研究ブランディング事業主催 第3回ジョン・ラファージ研究シンポジウム開催のお知らせ 「ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教：教義と寛容」

日 時：2019年12月21日（土）13：30～17：00
会 場：土樋キャンパス ホーイ記念館ホール

趣旨説明：

- 鐸木道剛（本学文学部教授）
「宗派を超える芸術：ジョン・ラファージのステンドグラス」

パネリスト：

- ダヴィド・エッケル（ボストン大学教授）
“The Boston Buddhists; Ernest Fenollosa and William Sturgis Bigelow”
- ロジャー・ウォーナー（歴史家・編集者）
“The Great Escape of William Sturgis Bigelow”
※ウィリアム・スタージス・ビゲローの従兄弟の曾孫で、京都を空襲から救ったと言われているランドン・ウォーナーの兄の孫。
- キャロル・バンディ（ハーバード大学講師）
“From Japan to Mars: The Long Strange Journey of Percival Lowell”
※パーシヴァル・ローエルの妹の曾孫。



文部科学省私立大学研究ブランディング事業とは：

学長のリーダーシップの下、大学の特徴ある研究を基盤として、全学的な独自色を大きく打ち出す取り組みを行う私立大学に対し、施設費・装置費・設備費と経常費を一体的に支援するもので、各大学の特色化・機能強化の促進を目的としています。東北学院大学は、「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」との事業名で平成28年11月22日に採択されました。

東北学院大学研究ブランディング事業通信
第28号

2019年11月9日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

TEL：022-264-6547

E-mail：branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

URL：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/theology/